

「冀東」の構想

——殷汝耕と池宗墨——

- 一 はじめに
- 二 冀東政府と日本
- 三 殷汝耕・池宗墨の経歴
- 四 殷汝耕の議論
 - (一) 冀東政府成立以前の議論
 - (二) 冀東政府成立後の議論
- 五 池宗墨とその議論
 - (一) 冀東政府参加以前の議論
 - (二) 冀東政府以後の議論
- 六 「防共」と「聯省自治」
- 七 殷汝耕・池宗墨に對する議論
 - (一) 中國での議論
 - (二) 日本での議論
- 八 小結

關

智

英

一 はじめに

滿洲國成立後の一九三〇年代半ば、河北省の滿洲國に接する兩國の緩衝地帯に冀東防共自治政府（以下當時の略稱から冀東政府^①）なる組織が樹立されたことについては、これまでも日中戦争に至る日中關係史を説明する文脈で言及されてきた。本稿では、この冀東政府を中樞で擔った二人の人物、殷汝耕（同政府長官）及び池宗墨（同政府祕書長）の議論を通して、近代中國史上における冀東政府の性格について検討を加える。

冀東政府の研究は、日本の華北分離政策研究を嚆矢とする。すでに一九六〇年代に秦郁彦・島田俊彦は河北省香河での自治運動から冀東政府が成立した経緯を整理し、九〇年代には、安井三吉が冀東政府が中國人の「自主」的運動という形態をとった點を、日本の華北分離工作の頂點であると同時に、その限界を示したものとした。^{②③}これに對する中國側の動きにも注目したのが、内田尚孝や光田剛の研究で、冀東政府についても言及している。^④

これらの論點を整理すると、一・滿洲國成立後の一九三三年五月に、日中兩軍による停戰協定（塘沽停戰協定）の結果、河北省北東部に非武装中立地帯が設けられ、二・そこに南京の國民政府からの自治を標榜する冀東政府が成立し、それに對抗して國民政府傘下の緩衝組織として冀察政務委員會が成立、三・冀東政府が低關稅政策を實施したことで、日本製品が冀東を通じて大量に中國に流入することになった（冀東特殊貿易）、と纏められる。

續いて登場したのが冀東政府そのものを對象とした研究である。廣中一成は冀東政府について、同政府で長官を務めた殷汝耕の経歴・滿洲國との關係・防共政策などから検討を試み、藤枝賢治は冀東特殊貿易について検討した。^{⑤⑥}また吉井文美は、英國經營の開灤炭礦と冀東政府及びその後の中華民國臨時政府との交渉過程を検討した。^⑦その他、冀東政府成立のきっかけになった香河事件と、日中戦争勃發後上海に成立した上海市大道政府との人的・思想的繋がりを明らかにした研究^⑧、殷汝耕のアジア主義言説を検討した古屋哲夫の研究、池宗墨の『王道經綸論集』を分析した劉岳兵の論考がある。^{⑨⑩}

国外では、中國に冀東政府に關する研究が複數存在し、冀東政府に關する史料集も纏められた。⁽¹⁾しかし、そのほとんどは冀東政府の概説にとどまり、個別の問題については李秉奎・付春瑞による冀東政府の警察組織に關する論考がある程度である。⁽²⁾

こうした研究により冀東政府の事實關係についてはかなり整理されたとと言える。ただ、多くの先行研究が冀東政府を専ら「偽政府」「傀儡政權」といった觀點から説明していることもあり、同政府關係者の意圖やその思想的背景まで深く掘り下げた分析はなされていない。冀東政府がどのように自らの立場を説明し、いかなる將來構想を表明し、それを實踐しようとしていたのか、という點はほとんど明らかになっていないのである。これには、政權中樞を擔った殷汝耕や池宗墨の政治的知名度が相對的に低かったことや、當時彼らに對して中國側から「傀儡、漢奸は失意の軍閥・官僚・政客及び新興の恥を知らない知識分子の變節」⁽³⁾といった評價がなされたことも關係していよう。しかし、殷汝耕や池宗墨の冀東政府を説明する言説は、日中戰爭中に中國占領地に樹立された諸政權の議論とも符合する部分が多く、それは當時の中國社會の抱えていた諸問題とも無關係ではなかった。従つて殷や池の議論を検討することは、近現代中國社會を理解する上でも必要な作業である。

本稿では殷汝耕と池宗墨の議論の分析を通して、兩者と冀東政府との關わりを明らかにし、同政府の性質を検討する。その際次の三點、一、殷汝耕が辛亥革命に参加し一九一〇年代から知日派中國人として日本の媒體で多くの議論を發表した點、二、冀東に來るまでの池宗墨が政治家としてよりも教育者・實業家として活躍していた點、三、冀東政府の成立後は、殷汝耕よりもむしろ池宗墨が冀東政府を理論的にリードした點に留意する。

用いる史料は日本・中國で發行されていた新聞、雜誌の他、冀東政府刊行物、天津で發行されていた雜誌『北支那』（北支那社）、外交文書等である。以下、まず冀東政府の概要、續いて殷汝耕・池宗墨の經歷を整理した上で、その議論を検討する。

二 冀東政府と日本

冀東政府は一九三五年一月二五日、河北省東部の二三縣を領域（以下冀東地區）に、通州に成立した。⁽¹⁵⁾面積は約一萬五〇〇〇平方マイル（三萬八八五〇平方キロメートル）で、日本の九州と同程度、人口は約六二五萬人であった。⁽¹⁷⁾冀東地區は一九三三年五月締結の停戰協定で定められた非武装中立地帯に由來する。國民政府はここに行政單位として灤榆區・薊密區を設け、殷汝耕を後者の責任者（行政督察專員）としたのである。

冀東政府成立のきっかけは、一九三五年一〇月二〇日に非武装地帯で起きた農民運動にあるとされている。⁽¹⁸⁾しかし、現地に國民政府に對する反感があったことは否定できないものの、この動きには滿洲國關係者や現地日本軍人が關與していた。冀東政府で稽查處長を務めた宮田天堂は、すでに冀東政府成立に先立つ一九三五年九月一九日の時點で、學生時代から面識のあった大橋忠一（滿洲國外交部次長）から「殷汝耕と云ふ人が支那民族の自立と日滿提携と云ふ東洋平和の大使命から今度冀東に防共自治政權を樹立して死を賭してやることになつてゐる。就いては是非殷氏を扶けて働いてもらひたい」と言われて、殷汝耕の許に行つたとしており、農民自治運動勃發以前にすでに冀東政府樹立の劃策があつたことがわかる。⁽¹⁹⁾また、この農民自治運動そのものにも日本人が關與してゐた。⁽²⁰⁾

成立後の冀東政府は、後述するように國民政府を批判し、親日滿を標榜した。ただ外相佐藤尚武らが冀東政府に反對していたように、同政府には日本政府の全面的な後ろ盾があつたわけではなかつた。これが露呈したのは、一九三七年三月に國民政府外交部部長に就任した王寵惠が「冀東政府の解消が日中國交調整の前提」との含意を表明した時である。折しも外相佐藤尚武が日華實業協會會長兒玉謙次を團長とする經濟視察團を南京に派遣し、兒玉がこの國民政府側の提言に理解を示したことも、冀東政府を苦境に陥れた。

これに對し殷汝耕は、冀東政府の存立は中國の内政問題で、斷じて日本政府の指圖は受けないとの聲明を發し、日本政

府を非難した。同じ頃一九三七年四月に開かれた名古屋汎太平洋平和博覽會の「冀東デー」で、殷汝耕が通州からラジオの國際放送を行った際にも、その差し止めをはかる外務・陸軍兩省と現地陸軍との間に確執が生じた。⁽²¹⁾

盧溝橋事件勃發後の一九三七年七月二十九日、冀東政府保安隊が叛亂を起し、通州の日本特務機關が全滅した他、多數の在留日本人が殺害された。この際、殷汝耕も叛亂軍に逮捕監禁され、失脚した（通州事件）。

これにより政府長官には祕書長の池宗墨が就任し、政府も通州から唐山に移った。その後、日中戦争の進展により日本の占領地が擴大すると、華北占領地全體の新政權樹立が摸索され、一九三七年十二月、北京に中華民國臨時政府が成立した。間もなく冀東政府もこの臨時政府に合流することとなり、一九三八年二月、冀東政府は解消した。

三 殷汝耕・池宗墨の經歷

冀東政府での議論は、殷汝耕・池宗墨を中心に展開された。他に殷の甥で實業廳廳長の殷體新や建設廳廳長王廈材の文章が確認されるが獨自性はない。⁽²³⁾ 殷及び池の議論を追うことで、冀東政府の議論はほぼ網羅することができる。もちろん殷・池の議論をそのまま彼らの本音と見做すには留意が必要である。ただ、本稿では少なくとも彼らの議論は冀東政府への支持擴大を狙って行われた點を重視したい。彼らは冀東政府の立場をどのように説明したのか。その説明の仕方に冀東政府の性質が表れていると考えるのである。

殷汝耕・池宗墨の議論を分析するにあたり、彼らの經歷を簡単に整理しておく。兩者は浙江省平陽出身で、ともに日本への留學經驗を有している。殷汝耕（一八八五—一九四七）⁽²⁴⁾ は上海震旦書院に學んだ後、一六歳で日本に渡り、第一高等學校豫科から第七高等學校造士館に進んだ。この時期に中國同盟會に参加し、辛亥革命後は黃興と共に湖北省で革命に従事した。一九一三年、第二革命が失敗すると再び日本に渡り、早稻田大學政治學科に入學した。永井柳太郎の授業では口頭試験の際に永井と革命を論じること數時間に及び、他の學生の試験時間の大部分を獨占したというエピソードが伝えられ

ている。⁽²⁵⁾

この時期の殷汝耕の政治的立場は、當時殷が歐事研究會に参加していたことが手掛かりになる。歐事研究會は、袁世凱帝制に反対した中國の革命派のうち、孫中山の獨裁的傾向に反対する人々が黃興を精神的支柱として東京で組織した團體である。後年殷汝耕は孫中山の護法政府に参加するが、その後も政治の獨裁的傾向には否定的であった（後述）。

一九一六年、殷汝耕は早稻田大學を卒業し、中華民國衆議院の書記官になったが、同年秋には銀行制度調査を名目に來日し、革命運動に従事した。⁽²⁶⁾一九二一年九月には東洋拓殖會社からの借款で江蘇省阜寧に新農墾植公司を設立して實業界に轉じたが、孫中山が護法政府を樹立すると、その駐日委員として再び日本に滞在した。

殷汝耕が郭松齡事件に係ったことも、その政治的立ち位置を考える際に参考となる。一九二五年一月、當時東三省で覇を唱えていた張作霖に對し、部下の郭松齡が叛亂を起こした。郭松齡は中國同盟會員として辛亥革命に關わり、孫中山の護法政府に参加した經歷を持つ軍人で、張作霖の麾下にあったとは言え、國民革命に理解ある人物であった。殷汝耕も郭松齡を支持して、當時北京で開催されていた關稅會議を離れて郭陣營に参加した。殷汝耕が参加した背景の詳細は不明だが、日本と東三省の間に「立つて努力し多少の効果でもたらすことができるなら非常に本望であると考えた」という。⁽²⁸⁾しかし日本が郭松齡の動きを牽制したこともあり、結局郭の試みは失敗し、殷汝耕も日本領事館に逃亡した。殷汝耕にとって郭松齡事件は特別な意味を持っていたようで、郭松齡が反張作霖の旗を掲げた一月二四日にちなんて冀東政府の獨立を宣言したと證言している。⁽²⁹⁾

一九二六年一月、殷汝耕は國民革命軍總司令部通訊處處長兼參議として北伐に参加した。また一時下野していた蔣介石の日本語通譯も務めた。二七年四月の上海クーデター後は、上海市長黃郛の下で秘書を務め、二八年三月に黃郛が外交部部長に就任すると、これに従い駐日外交特派員となった。

山東省濟南で日本軍と國民革命軍が衝突したのは、殷汝耕が駐日外交特派員の時期だった。殷汝耕は日本と國民政府の

交渉の最前線に立ち、次期駐日公使として名前が挙げられもした。⁽³⁰⁾しかし一九二八年二月、突然殷汝耕は通譯の資格を取り消され外交部を離れることとなる。これは一説によると南京を訪問した床次竹二郎（新黨俱樂部代議士）が蔣介石ら要人と會談した内容を、殷が首相田中義一に漏らしたためとされている。

殷汝耕の田中義一への情報漏洩については、郭松齡事件で殷と行動を共にした齊世英の證言や、戦後開かれた殷の裁判に資料として提出された新聞記事（德柏「老牌間諜殷汝耕」『救國日報』一九四六年六月七日）が詳しい。それによると殷汝耕からの情報漏洩の話は、床次から梅屋庄吉・馬伯援（中華留日基督教青年會幹事）を経て中國政府に傳わり、殷は蔣介石通譯の資格を失ったという。⁽³²⁾しかしこの漏洩の事實は床次竹二郎の傳記他、日本側の史料では確認できない。そもそも一九二八年二月の床次の中國行は田中義一の了解の上で行われていた。歸國した床次は田中と二度にわたって會談したが、結局田中内閣の對中方針が變化することはなかった。⁽³³⁾ただ床次竹二郎の訪中後に殷汝耕が外交畑から離れているのは確かなので、國民政府から通譯者として殷の資質に何らかの嫌疑をかけられたことは確かと考えられる。

この後、殷汝耕は交通部航空司司長に就き、しばらく外交の舞臺から遠ざかったが、一九三二年一月に第一次上海事變が勃發すると、上海市長吳鐵城の要請を受け上海市政府參事として事變の處理交渉にあたった。さらに一九三四年五月、北平政務整理委員會委員長黃郛の招きで華北に赴き、同年十一月には薊密區行政督察專員に就任した。この際も殷は黃郛に招請されたわけだが、この華北行が冀東政府に關わる直接の契機となった。

私生活では殷汝耕は一九一七年九月に寺尾亨（東京帝國大學教授、孫中山を支援）の媒酌で井上宅輔の長女民恵と結婚した。⁽³⁴⁾當時殷汝耕は日本では文明批評家として、また中國では日本通として知られていた。⁽³⁵⁾冀東政府成立後殷汝耕と會見した尾崎秀實は、殷汝耕を「一世の風雲兒」で「冀東の一角に叛旗をいち早く掲げたことはもとより周圍の事情にもよるがまたこの人の持つ一種の叛骨と情熱とを語るもの」と解説している。⁽³⁶⁾

このように殷汝耕は中國と日本を行き來しながら、斷續的に革命運動に關わり續け、堪能な日本語や日本人との關係を

主な政治資源として活躍の場を広げた人物であった。また、中華革命黨から距離をとったように、政治的獨裁に對しては一貫して批判的であつた。

一方の池宗墨（一八九〇—一九五二）は、東京高等師範學校・明治大學で學んだ。殷汝耕が革命に身を投じたのに對し、池宗墨は教育方面に進路を取り、歸國後は浙江省首席督學官・北京高等師範學校教授・尙志大學教授・北京中學校長・廈門師範學校校長などを歴任した。その後中國銀行に入り、さらに一九二三年一月に江蘇省常州で利民紡織副經理に就任し、二五年にはこれを通成紡織と改稱した。⁽³⁷⁾

通成紡織での池宗墨は、工場労働者の福祉向上を目指した（後述）。一九三五年、池は殷汝耕の招きで薊密區行政督察專員公署祕書長に就任し、同年十一月の冀東防共自治委員會の成立により、そのまま同委員會の祕書長となった。一九三七年七月、通州事件により殷汝耕が失脚すると、池宗墨は殷に替わつて政務長官に就任した。

四 殷汝耕の議論

（一）冀東政府成立以前の議論

冀東政府成立以前の殷汝耕の議論は管見の限り三三篇確認できる【表】。このうち中國語による論考は六篇で、他は全て日本語で日本の媒體に掲載された。殷は日本を舞臺に政治・經濟・文化など幅廣く議論を展開したが、そこには殷の政治への立ち位置が表れている。一方、殷が中國語で發表した内容は、日本風俗の紹介や實務的な報告書に限られている。日本では「日支兩國の最近の事情に最も精通した人」と廣く知られた殷だが、中國の言論界では日本事情の紹介者に過ぎず、その知名度も限定的であつたと考えられる。⁽³⁸⁾

殷汝耕の議論は以下見るように、日中提携を前提としつつも、中國の民意尊重を日本に求め、是々非々で臨むべきとい

【表】冀東政府成立以前の殷汝耕の論考

発行年月日	論 題	掲載紙／掲載誌
1917 年 6 月 16 日	日支親善に就て日本の朝野に訴ふ	『東京朝日新聞』
1917 年 8 月 26 日	日支借款問題	『東京朝日新聞』
1918 年 8 月 6 日	借款是非	『東京日日新聞』
1919 年 1 月 19 日～20 日	日支関係の新紀元	『東京日日新聞』
1919 年 11 月 5 日	靳内閣の前途	『東京朝日新聞』
1921 年 1 月 2 日～7 日	偽らざる對日感情の告白 —— 日本尊信から排日まで	『讀賣新聞』
1921 年 8 月 23 日～9 月 4 日	目覺めたる支那より —— 親愛なる日本國民へ	『讀賣新聞』
1921 年 8 月 23 日～24 日	大勢は聯省自治	『東京朝日新聞』
1921 年 12 月 22 日～23 日	華盛頓會議と日支今後の關係	『讀賣新聞』
1922 年 5 月 2 日～7 日	動亂の支那を眺めつゝ	『讀賣新聞』
1922 年 6 月 6 日	黎氏の出廬に多大の期待は無理	『讀賣新聞』
1923 年 8 月 20 日	支那の社會組織と經濟界の將來	『東京工場懇話會會報』第 14 號
1924 年 4 月 23 日	日支提携して白人の壓迫を脱せよ	『東京朝日新聞』
1924 年 4 月 24 日	人種の自衛の要 —— 日支の徹底的覺悟の下に	『大阪朝日新聞』
1924 年 6 月 30 日	米國排日の對策 —— 日支兩國の共存共榮	『讀賣新聞』
1924 年 7 月	亞細亞に於ける日支兩國の地位	『東洋』第 27 卷第 7 號
1924 年 7 月 15 日	加藤内閣に對する支那國民の希望	『外交時報』
1924 年 9 月 15 日	蘇浙戰を中心とする時局概觀	『支那時報』1924 年 10 月號
1924 年 10 月	大亞細亞主義とは何ぞや	『日本及日本人』
1924 年 11 月	支那といふ國	『女性改造』第 3 卷第 11 號
1925 年 11 月	關稅自主權之眞義及目前推移之形勢	『銀行月刊』第 5 卷第 11 號
1926 年 7 月 21 日～8 月 15 日	半載回顧錄 —— 重圍を逃れて	『大阪毎日新聞』
1927 年 7 月 13 日	民族民權民生 謂ゆる三民主義 —— それは一貫した精神を有する	『京城日報』
1927 年 8 月	自由平等と三民主義の高調	『東方公論』第 2 卷 8 月號
1927 年 8 月	三民主義と共產主義 —— 三民主義大綱の解説	『支那時報』
1927 年 11 月	徹頭徹尾誠意の人	『中央公論』
1928 年 3 月 18 日	〔北京陷落も近き將來〕	『東京朝日新聞』
1928 年 4 月 16 日	日本人の衣食住及其禮節 —— 在日本對我國留學士官生的演講詞	『知難週刊』第 55 期
1928 年 4 月 28 日	日本之家庭制度及其文化之特點	『知難週刊』第 56 期
1929 年 9 月 17 日	收回航權之意見	『銀行週報』第 13 卷第 36 號
1930 年 1 月	日本之風俗人情談	『日本研究』第 1 卷第 1 期
1932 年 7 月	淞滬戰區之接管	『時事月報』第 7 卷第 1-2 期

うものであった。また當時日本で隆盛していたアジア主義にも一家言持っていた。以下、概ね時代順にその議論を確認していく。

日中提携と民意の尊重

管見の限り最初の議論である「日支親善に就て日本の朝野に訴ふ」（一九一七年六月）において殷汝耕は、「日本は支那の何れの黨派と提携すべきや」と問い、日本が「支那國民と提携」するためには知識階級を重視し、「民黨」と提携すべきと訴えた。同時期の「日支借款問題」（一九一七年八月）でも、民意の在處に注意すべきと述べている。ちなみに「民黨」は「吏黨」（藩閥政府支持派）の對義語として明治期日本で使われた用語だが、ここでは北京政府に對抗した孫中山らを指していると考えてよいだろう。

歐洲大戰の終結を迎えて書かれた「日支關係の新紀元」（一九一九年一月）では、「支那と日本との提携は只兩國のみの利害に非ず」、東洋平和・東洋文化の擁護發揚・世界人類永久の平和のために必要なものであると述べた。

このように殷汝耕は日中の提携を標榜したが、それは日本に對する要求と表裏をなしていた。「對日感情の偽らざる告白」（一九二一年一月）では、中國に對しては侵略的でありながら、歐米に對しては弱腰な日本政府の態度を問題視した。その上で、「日本國民が直接に支那國民に接觸し胸襟を披ひきて談じたならば支那國民の希望の何たるかは立たちろに諒解される」と、兩國の國民のレベルでの交流を提唱した。⁽³⁹⁾

中國の新人とその經濟的側面への期待

日中の提携の重要性を指摘しながらも、殷汝耕は提携のためには日本人が獨斷的態度をあらためて、中國及び中國人を理解する必要があるとの立場にあった。「目覺めたる支那より——親愛なる日本國民へ」（一九二一年八月～九月）では、

日本人が舊式の官僚や軍人を相手に交渉したところで効果は少なく、むしろ「支那の利益を代表し」ている「民間の商人」や、その中心勢力たる「若い人達」の「潛勢力を支配する様でなければ眞に支那を理解したと云ふ事は出来ない」と主張した。⁽⁴⁰⁾

また同文章では、「支那國民は決して政治的國民では無い、寧ろ經濟的國民である」との議論も展開された。殷汝耕は「我等國民の求むる所は平安なる生活」で、「我等は救済の望みなき政治に見切を付け相率めて經濟に奔つた」と現状を語った。⁽⁴¹⁾そして、營利に強い關心を持つ中國人の國民性こそが中國の産業發展を後押しし、「自然の運命が國民を驅りて茲に至らしめた」ので、「日支關係は自然の法則に従ひ純經濟的に解決すべき」と述べた。⁽⁴²⁾このような勃興しつつあった新興の産業界に注目した議論の背景には、當時殷汝耕が江蘇省阜寧で開墾事業に従事し、政治から離れていたことも關係している。⁽⁴⁴⁾

聯省自治の提唱と「軍閥」の自滅

殷汝耕が日本で積極的に議論を發表していた一九二〇年代、中國の内政に關して殷が重視していたのが、聯省自治の實現と軍事指導者（軍閥）の自滅であつた。「大勢は聯省自治」（一九二二年八月）では、外交・軍事を除いて、産業開發のよくな、人民の生活に直接關係する分野は、各省に自治權限を付與した方が、中央集權よりも開發の效率が良いとする。

北京政府や軍事指導者に對しても殷は一貫して嚴しい姿勢を取り續け、「靳內閣の前途」（一九一九年十一月）では、「靳雲鵬は段祺瑞の一味であり、世間が期待するほどの成果が得られるかは疑問」と手嚴しい。

張作霖と吳佩孚が干戈を交えた奉直戰爭前夜には、「動亂の支那を眺めつ、」（一九二三年五月）を發表し、「支那の病根」は「武人又は軍閥の跋扈」であるとし、「支那一般の國民は彼等（『軍閥』）の自滅を寧ろ大いに心から喜んで待ち望んで居る」とした。そして「張吳の争ひはつまり軍閥自滅の期を早める所以で支那の爲めには喜ばしき事であるから争う

者をして任意に争はしめよ」と結んだ。

齊燮元と盧永祥による蘇浙戦争から中國の政治を論じたのが「蘇浙戦を中心とせる時局概観」（一九二四年九月）である。この中で殷汝耕は、この戦争は單に江蘇軍と浙江軍の戦争ではなく直隸派と反直隸派の戦争であり、さらに「主義思潮から論ずれば實に武力統一主義と聯省自治主義との大決戦」であると位置づけた。その上で、中國では歴史的に完全なる中央集權が行われたことがないので、「聯省自治の實地現出に由りて始めて安定すべき運命を有する」と、聯省自治こそ中國にふさわしい制度と述べた。

ワシントン會議と日中の今後

一九二一年一月から開かれたワシントン會議において、日本が山東權益の還付に對して讓歩的な態度をとったことは、殷汝耕を喜ばせた。「華盛頓會議と日支今後の關係」（一九二一年二月）で殷は、「實に日本は支那に對し好き傾向を示し初めた」と述べ、「廿一箇條撤廢必ずしも望みなきに非ず」と期待を寄せた。⁽⁴⁵⁾

一九二四年六月、二十一箇條要求の際に外相だった加藤高明が組閣すると、殷の思いはたかまった。「加藤内閣に對する支那國民の希望」（一九二四年七月）では、加藤内閣は「純然たる政黨内閣」で、「日本は初めて日本國民多數の意志に基く國策を樹て得る」と、日本人の對中感情が二十一箇條要求當時と比べて好轉している時期の組閣に期待を表明した。

アジア聯携と大アジア主義に對して

殷汝耕が滞在した一九一〇年代から二〇年代にかけての日本は、いわゆるアジア主義的言説が隆盛を見せた時期でもあった。とりわけ一九二四年に米國で排日移民法が成立することが傳わると、それへの對抗としてのアジア聯携乃至は日中提携の議論が増加した。

米國の排日案を受けた殷汝耕は「日支提携して白人の壓迫を脱せよ」（一九二四年四月）で、「白人の物資獨占の思想が其儘推移さるゝならば全世界に對しては白禍こそ憂慮」すべきと述べ、日中兩國に對し「有色人種間殊に黄色人種間の差別觀を根本的に除去する」こと、及び「西洋式の物資獨占の思想と植民思想を棄てさせること」を求めた。

續く「米國排日の對策―日支兩國の共存共榮」（一九二四年六月）では、米國の排日的態度を非難しながらも、米國への對抗としての「米國品排斥」や「日米戰爭」は「何れの方面から見ても有效の手段」ではないとし、日本は米國に對し「靜かに自重して其反省を待」ち、「抛つて置く方が得策」とした。

この文章で殷は當時日本で盛んに唱えられていた「アジア人聯盟」についても言及した。殷は日本でこうした議論が登場することは無理もないしながらも、「白人の横暴に對し東洋人が結束して相拮抗するは即ち暴に報ゆるに暴を以てするもので」賛成できないと述べた。ここで注目されるのは、殷が議論で用いた「吾人は所謂アジア人聯盟の如き霸道的のものを却けて、精神主義の大旗を翳し王道をもって歐米に對す可き」との枠組みである。⁽⁴⁶⁾

この「東洋王道」と「西洋霸道」という議論の枠組みですぐに想起されるのは、一九二四年一月末、孫中山が神戸で行った大アジア主義演説である。同演説で孫中山は「東方の文化は王道であり、西方の文化は霸道である」と述べた上で、「王道は仁義道德を主張し、霸道は功利強權を主張する。仁義道德は正義公道によって人を感化するものであり、功利強權は洋砲大砲を以て人を壓迫するもの」と、東洋的なあり方を肯定したのである。大アジア主義演説があまりにも有名であるために、この議論の枠組みは孫中山の創出という印象が強いが、孫中山の演説よりも殷汝耕の議論が半年ほど先んじているのである。

この議論の相互關係については別稿で論じたが、⁽⁴⁸⁾少なくとも孫中山の護法政府時期に殷汝耕が駐日委員として日本に滞在し、一九一八年五月に孫中山が訪日した際にも両者は會っていること、また孫中山の神戸訪問の際も殷が日本政府と孫中山（及び戴季陶他隨員）との事前折衝に當たり密接に關わっていることなどを考えると、⁽⁴⁹⁾孫中山の議論には殷の議論の枠

組みが何らかの形で影響している蓋然性が高い。

ただ殷汝耕のアジア主義に關する議論の中には孫中山とは異なる獨自性もみられる。それは先述のように殷が「暴に報ゆるに暴を以てする」大アジア主義には否定的であった點である。「大亞細亞主義とは何ぞや」（一九二四年一〇月）でも殷汝耕は、他民族と敵對することを目的とした大アジア主義を否定している。さらに殷は、アフリカの黑人や「米國インディアン」を例に、「白人」に抑壓されているのは「アジア民族」に限らないとし、抑壓されている諸民族の同盟を主張した。その際前提とされたのが日中提携であつた。

國民政府の成立と三民主義の擁護

孫中山の死後、護法政府は國民政府に改組され北伐を再開し、一九二六年一〇月には武漢を占領した。翌一九二七年四月には蔣介石が上海で反共產黨のクーデターを起こし、國民黨内から共產黨を排除した。この時期殷汝耕は上海市長黃郛の祕書や蔣介石の通譯を務めていたこともあり、その議論は國民政府の擁護に終始した感がある。

「自由平等と三民主義の高潮」（一九二七年八月）で殷汝耕は、三民主義は共產黨によつて一時曲解されたが、「清黨運動」（共產黨の排除）によつて「三民主義の眞正なる意義」が闡明され、それは「中華民國の現代の急切な要求で（中略）且一貫的精神を有するもの」と説明した。そして「國民黨の同志はすべからく一致して三民主義を極力宣傳し勇往邁進して一釐一毫たりとも、一分秒たりとも三民主義の立脚點をはなれてはならぬ」と述べた。

「三民主義と共產主義——三民主義大綱の解説」（一九二七年八月）では、「國民黨員を以て（共產黨の）組織を直したりする丈では徹底し得るものではない」と、共產黨の根本からの壊滅の必要性を述べ、合わせて三民主義を民衆に徹底させるべきと語った。

當時下野していた蔣介石については「徹頭徹尾誠意の人」（一九二七年一月）が詳しい。その中で殷は、蔣介石の革命

精神が「孫文氏の口にせられたと同じ様に博愛を基礎」としているので、「革命のリーダーとして最適」と絶賛した。

(二) 冀東政府成立後の議論

以上のように殷汝耕は、冀東政府成立前においては、日中の提携を主張しつつも、二十一箇條要求の撤廢を求めるなど、是々非々の態度で日本に臨み、「民意の趨向」を何よりも重視すべきとの議論を展開してきた。また國民政府時期には三民主義を讃え、蔣介石こそ中國のリーダーであると絶賛した。しかし冀東政府成立後の殷汝耕の議論はここから大きく變化することになる。その立場は、冀東政府成立宣言の内容を踏襲した「余が蹶起の理由」に詳しい⁽⁵⁰⁾（以下特記なき限り同文よりの引用）。

反國民黨・反國民政府

殷汝耕は國民政府から離脱して冀東政府を樹立するに際して、國民黨及び國民政府を痛烈に批判し、その罪として以下の六點を掲げた。

一點目は、第一革命（辛亥革命）・第二革命（反袁世凱運動）の失敗と挫折を経験した國民黨員が必ずや反省悔悛して、國の利益と民の幸福をはかることを國民が期待したにもかかわらず、護法を掲げる國民政府が自らそれを破壊したこと、二點目は、國民黨員がマルクスの邪説を伝え、ソビエトの虐政に心酔したこと、三點目は、中華民國立國の精神（『孔子の道』は、東亞の各友邦も共に信奉しているにもかかわらず、孫中山の三民主義のみを金科玉條として國民に強いたこと、四點目は、治水費用を私にし、根本的救済を圖らず、またアメリカに借款をなすなど、國民の負擔を加重し、國力を傾け、農村を疲弊困憊させたこと、五點目は、「支那民族」は和平を尙^{たうと}び善隣親仁を理念とするにもかかわらず、目的のために手段を擇ばず、「夷を以て夷を制するの陋策」で國際信義を蔑視し、一切の帝國主義を打倒すると高唱して善隣友邦の怨

みを買ひ、益々孤立し、國土を失ひ、外侮を招くに至つたこと、六點目は、徒らに歐米に心酔して奢侈を上下に瀾漫させ、勤勞儉廉を一掃し公債を濫發し、無理に現銀を集めて私せんと謀り、強制して紙幣に代えたこと（Ⅱ國民政府による幣制改革）、である。しかし、殷汝耕にとって國民政府の施策を批判することは、國民政府で活動してきた自身の経歴をも否定することになりかねなかつた。またこの當時すでに共產黨を排斥していた國民黨への批判は正鵠を射たものとは言えず、三民主義に對する批判は、それまでの自身の主張と明らかに矛盾していた。

殷汝耕は「黨國の要人たちはみな舊知の間柄」であるものの、内外の情勢を客觀的に檢討すれば他に道はなく、「多年に亘り〔殷汝耕自身が〕國事に參與してをりし故、先づ忠言を政府に進め翻然として秕政の改圖更新」を願つたものの、その忠告が受け入れられず、「遂に忍ばんとして忍び難く〔中略〕あえて一身の成敗利鈍を顧みず〔中略〕、國民政府及び國民黨の羈絆より完全に離脱し、自治を宣布して聯省の先聲たるべく以て東亞の和平の確立につくすことに決心」したという。また北平の日本公使館員に對して殷は「自分は嘗て國民黨に在り、日支國交改善の爲、長年微力を致したるも、蔣介石及國民黨は日支折衝の最後の或る重要な一點に到るや、其の責任を回避するを常とし〔中略〕終に愛想を盡かして今日の防共自治政府を組織せる」⁽⁵¹⁾と語っている。

このように殷汝耕は、自身が國民政府を離脱し、冀東政府を樹立した理由として、國民政府の失策や對日折衝の問題を擧げていた。ただ土肥原賢二と共に殷汝耕引き出し工作に關わつた專田盛壽は、行政督察專員就任後の殷汝耕が、關東軍から直接指導や援助を受け、非常に強い權力を持ち、日本側との關係を緊密にしていたこと、また土肥原による政權樹立の意向に對しても、「二つ返事」で應え、土肥原らの「豫期以上に徹底した反南京〔國民政府〕態度であつた」と、冀東政府樹立に殷汝耕が乗り氣であつたと回想している。⁽⁵²⁾

殷汝耕が床次竹二郎訪中後（一九二九年頃）に何らかの失點により蔣介石との間に溝ができたこと、にもかかわらず國民政府内に残れた背景に黃郛の重用があつた可能性はすでに述べた。しかしその黃郛は一九三五年春に對日交渉の失點を

理由に政界を離れていた（翌年逝去）。こうした状況下で殷汝耕が政治の世界に残ろうとすれば、頼れるのは日本との繋がりしかなかったと言える。そのため殷汝耕は日本側に對し快諾を與えたのであり、その背景には殷の權力に對する執着もあつたと考えられる。

もちろん政權欲だけで殷汝耕の全てを説明できない。冀東政府成立後に殷が強調した「日中提携」や「聯省自治」は、一九二〇年代半ばに殷が繰り返し主張していたものだつた。しかし一方で「華北自治運動」に對しては、「二・二九運動」が起きるなど中國國內では反撥する空氣が高まつていた。これまでの殷の政見を見れば、冀東政府の樹立が必ずしも「民意の趨向」に沿っているとは言い切れないことを殷は自覺していた筈である。

残念ながらこの主張の變化について殷汝耕の考えを知る術はない。しかし殷が、かつての自己の主張と自身の現状との間に何らかの矛盾を感じていた可能性はある。冀東政府成立宣言は、池宗墨が「新京より歸り北寧〔鐵〕路の汽車中」で作成したものを、最終的に殷汝耕が發表したに過ぎず、後述するように池宗墨の意向を強く反映していた。⁽⁵³⁾ 冀東政府の成立前は積極的に自らの政見を發表していた殷汝耕が、成立後は政府の重要宣言の起草を池宗墨に委ねているあたりに、殷の思いが圖らずも表れたと考えられるのである。

中華民國正統政府としての冀東政府

ただし斷言できるのは、殷汝耕が冀東政府を中華民國の正統政府として位置づけることに強くこだわつたことである。冀東政府は當初から「中華民國から獨立した國を建設することを目的としたものではない、あくまでも地方自治體の確立を目的としてゐる」と表明していた。⁽⁵⁴⁾ しかしこれを誤解する者も少なかつたようで、殷汝耕が冀東政府一周年に發表した文章からは、冀東と滿洲國が同一視されることへの警戒感が窺える。⁽⁵⁵⁾

一九三七年一月、ラジオマイクの前に立つた殷汝耕は、冀東政府の目的として三點、一、内政の改革、二、人民のため

に實際に福利をはかる、三、天道に順應して自治を實行する、を示すと共に、同政府の態度として三點、一、中華民國を離脱するものでない、二、身の獨善を計ろうとするものでない、三、政權を獨占する意志はない、を挙げた。そして冀東が臺灣や滿洲國とは異なり、中華民國であることを重ねて表明した。⁽⁵⁶⁾

一九三七年四月の會見でも殷汝耕は「冀東政府こそ中華民國の正統を繼承する機關⁽⁵⁷⁾」であると繰り返した。當時話題となっていた冀東政府解消問題に對しても、「南京政府が日本に冀東政府の解消を要求するなどは見當違ひも甚だしいものであり、日本人が冀東政府の解消を論議することも凡そ、無意味極まる⁽⁵⁸⁾」と國民政府と日本を批判し、冀東政府があくまでも中國の政權で、冀東問題が中國の内政問題であるとの立場を貫いた。こうした殷汝耕の姿勢は、政府旗として五色旗にこだわりを見せたことにも表れている（後述）。

五 池宗墨とその議論

冀東政府成立當初、池宗墨は殷汝耕との「竹馬の友たるの情誼⁽⁵⁹⁾」により華北に招かれ、「殷氏のよい女房役⁽⁶⁰⁾」と見られていた。しかし、政治の世界に身を置いてきた殷汝耕に對し、池宗墨は教育・實業界での經歷が長く、政治に直接関わった経験はなかった。池宗墨と政治との関わりは、殷汝耕に招かれて華北に赴いてからのことである。こうした事情からか、池の議論には教育界や實業界での経験に基づいた理想郷建設の意識が強く表れている。その點で殷汝耕とは中國社會の將來について立場を異にしていたとも考えられ、後で觸れるように冀東政府で兩者の違いは顯在化することになる。

（一）冀東政府参加以前の議論

孫中山との論争

池宗墨の留學以前の議論は限られているが、一九一六年に雲南で蔡鍔が反袁世凱の兵を挙げた際のエピソードが傳えら

れている。それによると當時日本滞在中の池は、「若き革命の血を湧かせて同じく亡命中の孫文を青山の隠れ家に訪れ」議論したという。その際、いづれ自身（＝孫中山）が大統領になると語った孫中山に對し、池は「それはいけない。あなたは大統領になる爲に革命をやるのか、そんな領袖からならば中國はメキシコになつて仕舞ふ」と言つたところ、孫中山が激怒し、以來池は「革命黨とは絶縁」したという。⁽⁶¹⁾ 冀東政府成立後の談話という考慮は必要だが、以下にも觸れるように池宗墨が學生運動や國民革命に懷疑的だつたことを考えれば、ありうる話ではある。

『孔子論』

池宗墨が日本留學中に、世界の諸思想との比較で孔子を論じ、日本を模範とした國家形成を唱えた『孔子論』なる文章を著したことは、池の思考を考える上で注目される。

『孔子論』は冀東政府成立後の一九三六年に日本で刊行されたものだが、執筆時期は中國で反袁世凱運動が収まつた一九一六年の少し後と考えられる（以下、本節の『孔子論』の引用は頁數のみを記す）。同論で池は、まず「野蠻から脱して文明の域に達するのは教化の力を受けなければ成らない」とし、中國と同じく古い歴史を持つインド・メキシコ・エジプト・メソポタミアが衰退したのに對し、「支那のみは猶ほ巍然として魯殿靈光の如く亞細亞の廣漠の原野に存在する」のは、中國に「孔子の道」があつたからとし、「孔道の興廢は實に支那存亡の門鍵」と述べた（二・四頁）。續いて「愛は西洋倫理學者が最も細かに説いてゐるが、我が孔子も決して忽かにしてゐない」と、孔子もまた西洋の諸概念を體現した存在であつたとした（六六頁）。その上でルソーやペスタロッチの思想の他（七二・七五頁）、釋迦・キリスト・ソクラテス・カント・ダーウインといった古今東西の思想家・學者の生涯と孔子のそれを比較した（八一―九〇頁）。そして「東西國情の相違によつて聖人の立説も違」つている點、また公德などを除けば「我が東洋の精神の文明は十分立派である」點から、中國が「西洋に倣ふ必要はない」とした（九二頁）。

では「孔子の道」によって立國された、池宗墨の考えたあるべき國の姿とはどのようなものだったのか。池の念頭にあったのは開國後、急速に近代化を遂げた日本の姿であった。池は「日本は絶東に在つて數千年來〔中略〕未だ一度も飛躍したことはなかつた」にもかかわらず、「内は維新の偉業を成し、外は空前の膨脹を致し僅々數十年にして〔中略〕一躍して世界の強國の林に入れるやうになつた」とし、その理由として「偉大の國魂」すなわち「大和魂」の存在を挙げた（九三九四頁）。そして「國は古今を問はず大小に關せず國魂あれば興る、國魂失へば亡ぶ」と述べ、中國の盛衰強弱は、中國の「國魂」である「孔子の道」の消長によると結論付けた（九五頁）。

冀東政府當時、池宗墨は「支那古學に對する造詣深き篤學の君子」と紹介され、孔子廟の復興も「復古精神の顯現」と説明されたが（九七頁）、少なくとも池の『孔子論』からは、池が孔子の議論を援用しながらも、發想は極めて近代的で、その理想とする國家像も國民國家に近いものであったことがわかる。また荻生徂徠の議論を引用したり（六一頁）、西洋の思想家と孔子を比較したりしていることから、その議論には當時の日本の儒教理解が影響を與えていたことも窺える。⁽⁶³⁾『孔子論』に序を寄せた神田隆介は、伊藤仁齋や荻生徂徠の儒教理解を指して「近代民族國家のイデオロギーとしての新しい儒學」と指摘したが（九八頁）、池の議論もまたその例に洩れなかつたのである。

通成紡織

池宗墨の通成紡織時代については、池宗墨自身による「利民通成紡織公司短纖維工業經營の經過と吾輩今後の覺悟」に詳しい。⁽⁶⁴⁾それによると池宗墨は、奉天省遼源の中國銀行在職時に友人黃朔初の誘いで、江蘇省常州の利民紡織の經營に關わり、後にこれを通成紡織廠と改め、その董事兼廠長となった。通成紡織は四番手から一〇番手（數字が大きくなるほど細い糸であることを示す）の太い綿糸を原料に、「乞巧牌」「賢母牌」といったブランドで絨毯や軍用ブランケットなどを製造し、中國内地を主な販路とする企業であつた。⁽⁶⁵⁾

この時期の池宗墨に纏わる以下の二つのエピソードからは、彼が實業家としての理想や合理性を重視し、國民革命の流れからは距離を取っていたことが窺える。

一つは一九二五年の五・三〇運動に關するものである。同運動は、上海の日系紡績會社に對する労働者の抗議が引き金となり、反帝國主義の運動として廣まったもので、まもなくこの動きは常州にも及んできた。一日、常州の學生達が通成紡織に押しかけ、同社が日本人を雇っていることを糾問した。集まった學生らに對應した池宗墨は、「國家がいまだ宣戦していないのに、外國人を雇用することに異議を唱えることはできない。技術が良くないと思えば解雇するだけだ〔技術が良いのに解雇することはない〕。もし諸君が國を愛するならば、勉強に戻って欲しい」と述べ、毅然とした態度をとった。

もう一つは國民革命軍の北伐に際してのものである。一九二七年三月、北伐軍が常州を占領した。この風潮に合わせて中國共產黨は工會（労働組合）を組織したが、池宗墨はこれに對抗して職工會を組織した。また國民政府成立後の三〇年末、軍政部軍需署から突然ドイツ人顧問が派遣され、通成紡織買い上げの話が出たものの、結局協議は成立しなかったという。池が共產黨に否定的で、國民政府とも是々非々の態度であつたことが窺える。⁽⁶⁶⁾

通成紡織での池宗墨は從業員の福利厚生に盡力した。池は一〇年にわたつて築き上げた通成紡織を自身の「ユートピア」であるとした上で、中國にある千數百の各縣それぞれが千人規模の工場を持ち、その指導者が労働者と甘苦を共にし、利益を圖れば、中國は富強になるとした。また失敗を恐れなかった漢の高祖と、一五年にわたつて太平天國と對峙し、不屈の心を持ち續けた曾國藩を自身の師であるとし、實業に携わる者が志を堅持し、不屈の心を以て勇猛邁進することを願つた。⁽⁶⁷⁾

經營者として中國社會の將來を語る

同時期池宗墨は、中國社會についても自らの見解を披瀝した。ここでは中國が直面する三つの危機として、一、百年來の列強の武力侵略、二、百年來の列強の經濟侵略、三、百年來の國家の根本的破壊、を挙げ、文化程度が低く覆滅するこ
とができた匈奴や滿洲族と異なり、列強の勢いは強いこと、また現在の「軍閥」の割據は歷史上類を見ないほどひどいこ
と、等を述べた。そして青年に對し、身體・精神を鍛える必要性、すなわち身體面では運動及び早起きの二點、精神面では、安定・節約質素と讀書の三點を求めた。⁽⁶⁸⁾

池宗墨は講演會でもこうした理念を語った。一九三三年二月の中華國貨產銷合作協會での講演では、工場經營に必要な
ものとして六つの指摘をしている。それは、一、最初は必ず失敗するもので、必ず再度やってみること、二、中國人
の心理に往々にして存在する「差不多（『大體同じ』）」は成功の敵である、三、工業を行うには、面倒を恐れてはならな
い、四、工業を行うには「唐僧取經（玄奘がインドに經典を取りに行った故事。轉じて困難を乗り越えて物事を成し遂げ
る意味）」の精神を持たねばならない、五、國貨（『國產品』）事業に従事する者は、最大の決心をしなければなら
ない、六、現在外國人經營の事業は技術も優れ、管理も良く、その上資本もある。國貨事業従事者はこれと争わねばなら
ない、というものであった。そして最後に「愚公山を移す」の故事を引き、たとえ自分自身が成功できなくとも、子々孫々に
引き繼いで、成功を目指すべきと語った。⁽⁷⁰⁾

通成紡織參觀記

池宗墨の活動は、「池宗墨先生の忍耐力を以て熱心に國貨事業に努力奮闘されるさまに佩服する」といった記事や、次
の參觀記のように、新聞でも好意的に紹介された。⁽⁷²⁾

この參觀記の執筆者蔣維喬は江蘇省教育廳廳長などを務めた常州出身の教育者で、北伐後は政界を離れ上海光華大學で

佛敎學を講じていた。⁽⁷³⁾ 一九三三年六月二九日から七月九日にかけて通成紡織やその周邊を巡った蔣は、通成紡織について「優良環境」と好意的に記録している。⁽⁷⁴⁾ ちなみにこの參觀記は池宗墨が持参した文章に蔣維喬が手を入れたものであった。⁽⁷⁵⁾ その内容からは池が職場環境に關心を持っていたことがわかる。

……工場内外にはアオギリ・イブキが植えられ、到る所濃緑の陰を作っており、そこに入ると工場であることを忘れてしまう。「中略」労働者は千人近くいるが、協力同心しない者はなく、「みな」工場を愛護している。「中略」職員は一律に黄色の制服を着て、あちこち指揮し、活力がみなぎり、そのため労働者の顔には喜びの色があり、仕事にも緊張感がある。工場長池宗墨君及び副工場長方少和君、工務處長章育文君ら〔の関係〕は、身内・子弟のようであり、そのため工場の仕事の進行は思いのままで、その効果は無形の中に表れている……

以上見てきたように、冀東政府参加以前の池宗墨の議論や周囲の評価からは、實業界で成功を収めた企業家としての姿、中國の現状に對する危機意識、またそれを積極的に世に訴えようとした様子がうかがえる。こうした活動が、殷汝耕の目に留まり、華北への招聘に繋がったと考えられる。

(二) 冀東政府以後の議論

理論的支柱

一九三五年春、殷汝耕は池宗墨の「少く可からざる人物たることを知り、書を馳せて其の北上を促がし」、池は「通成紡織會社の事業を抛つて北上し」た。⁽⁷⁶⁾

池宗墨は少なくとも「冀東防共自治委員會成立宣言」(一九三五年一月二四日)、「冀東政府の使命」(一九三六年三月)、

「冀東防共自治政府一週年記念に國人に告ぐる書」(一九三六年一月二五日)の起草に携わっており、實質的に政府の議論をリードしていた。⁽⁷⁾

冀東政府成立直後通州を訪問し、殷汝耕・池宗墨と會見した岡部嚴夫は、池宗墨の「見てくれました、見てくれましたか。今朝のあの宣言を。ありや僕が書いたんですよ。國民政府の稅政六ヶ條をあげました。もう怵へきれませんよ」という發言を記録している。⁽⁷⁸⁾

當時華北の新聞界で活躍した武田南陽の戦後の回想では、武田が土肥原賢二(奉天特務機關長)より政府宣言の「大義名分」執筆の委囑を受け、池がそれを持ち歸り、殷が記者會見で發表した、という。⁽⁷⁹⁾ こうした事情を勘案すると、文章の起草には武田南陽と池宗墨が関わったものの、殷汝耕は宣言起草に直接は關與しなかったと考えられる。

冀東政府における池宗墨の發言は、「日本は別に侵略の野心はない。日本は是れ先進國で兄である。中國は之に追隨して行く弟である。彼此眞誠でなければ提携することは出来ぬ」(一九三七年一月一七日)といった議論のように、日本優位を前提とした日中提携論に象徴される。池は、「外夷の侵略を避け、而して安居樂業を謀つた」長城を一人一人の心の中に「造成して以て禍患を避けよ」と述べ、「現在東亞〔中略〕最大の長城」は「我が友邦日本である」⁽⁸¹⁾とも語っている。池はあくまで日本を中國の上位に置いたのである。

長官就任後の池宗墨は、こうした方針に「如し服従せざるものあらば即ち是れ政策を破壊するものであるから、殺も亦惜まない」と強い態度を示し、「政府の政策、本長官の命令に對しては、眞實に服従し以て大亞細亞主義の目的を達到することを期したい」⁽⁸²⁾と、政府の方針への服従を説いた。ちなみにここに登場する「大亞細亞主義」についての詳しい言及はないが、先述の孫中山との確執を考えれば、孫中山の大アジア主義の援用ではなく、漠然と日本を盟主としたアジア聯帶を意味したものと考えられる。

當時の世界潮流について池宗墨は、「一は國民陣線〔＝戰線〕であり、一は人民陣線である」と分析し、「南京〔國民〕

政府は誤つて人民陣線に入つた。さうして蘇俄（「ソビエトロシア」）の法を以てして中國に施した、と非難した。⁽⁸³⁾そして「防共の後には必ず須らく自治すべきである。自治といふことは各々自ら政を爲すのではありませぬ。乃ち聯省自治の謂である」として、⁽⁸⁴⁾將來の中國政治の形は「聯省自治」であるべきとした。

「孔孟學徒」として

以上の政策論の基底をなしていたと考えられるのが、「孔孟學徒」・「支那古學に對する造詣深き篤學の君子」⁽⁸⁵⁾（前述）などで紹介された、池宗墨の思考法であつた。ただ以下に見るように、ここでの「孔孟學徒」は、嚴格な意味でのそれとは異なつていた。池宗墨は指導的立場にある知識人として、社會に對する責任に自覺的で、發言には中國古典からの引用も見られるものの、その發想方法は近代的な感覺も影響していたのである。

例えば學生に對する講演で池宗墨は、「一、禮貌あれ〔中略〕二、須らく清潔なるべし〔中略〕三、須らく勞に耐ゆべし〔中略〕四、日記を記せ」と發言しているが、⁽⁸⁶⁾少なくとも日記を記すことは、本來の「孔孟の道」とは直接關係ない。また師範學校學生に對する、「師範生は是れ未來小學生の父母であつて將來國民の模範であるから、其の責任は至つて重大である〔中略〕學生の第一義とは人格あることを要する」という發言の中に見られる「國民の模範」といった發想も、⁽⁸⁷⁾極めて近代的である。

池宗墨の發言や行動からは、池が實際に人々の生活態度にまで踏み込もうとしたこともわかる。例えば池は、官僚に對して「現在の公務員は三誠を守るにあらずんば不可である。一に髮を蓄へず、二に嫖賭せず、三に吸煙せず、能くかうした三誠を守り、僧家の清規を守るが如くすべき」とし、⁽⁸⁸⁾「大家皆自愛するを知り、官規を恪守し、廉潔政府を造成し、人民の爲に幸福を謀り、國家の爲に模範を作さんことを」⁽⁸⁹⁾求めた。

池宗墨の議論は決して發言だけに止まらなかつた。池は長官就任後冀東各縣を巡り、官僚のあるべき姿について度々講

演したが、自身が目にした官僚の不真面目な態度に對しては率直に怒りを表し、「公務員が受くる所の國家の俸祿は、即ち是れ人民の脂膏」であること、また殷汝耕長官時代には「僚屬と長官と」が出會つた際も「相識らざるが若く尊卑長幼の序を隠失」していたが、今後はそうした態度は許されないことを嚴命した。⁽⁹¹⁾

こうした池宗墨の方針は、政務長官就任後には政策として具體化された。池は通州事件後、冀東政府の制度改革を實施し、「民意暢達の機關」として自治參議會、「政府の會計を明朗化」する審計處、「從來の閭閻中心を打破革新」する官吏登用機關として官吏甄錄委員會、「綱紀肅正」のための官吏懲戒委員會を設け、「實務主義」を掲げたのである。⁽⁹²⁾

中國人の習慣に對しても池宗墨は改善の餘地が多いと見ており、中國人がよく口にする「差不多」を批判した他、中國の兵隊が「金でヒツクリ返るので此奴は困まつてゐます」と、兵隊の質の惡さを嘆いた。⁽⁹³⁾ この改善のため池は、中國人は「必ず須らく人の長とする所を採り、而して我れの短とする所を補ふべし」と語つたが、そこで想定された「人の長〔他人の長所〕」は、先述の『孔子論』の内容を踏まえれば日本であつたと考えられる。池にとって、中國と日本が提携することは自然なことであつた。

池宗墨は『淮南子』を出典とする「澹泊明志 寧靜致遠〔淡泊でなければ志を明らかにすることができない 落ち着いてゆつたりした氣持ちでないと、遠大な境地に達することができない〕」を座右の銘としていた。⁽⁹⁵⁾ 官僚はどうあるべきか、また組織・政府の指導者として官僚にいかに対處し、振舞うべきか。池の議論からは、こうした問題に極めて自覺的であつた池の姿が見えてくる。

このような池宗墨にとって、冀東政權での活動は、通成紡織での實踐の延長線上に位置するものだった。後年、池は華北勞工協會理事長に就任するが、これも池の通成紡織での労働者管理や、指導者としての姿勢が評價されたものと考えられる。

六 「防共」と「聯省自治」

冀東政府が名稱に冠している「防共」と成立宣言でも言及された「聯省自治」についても觸れておきたい。冀東政府編纂の教科書でも「防共自治の冀東」という表題の文章で、「防共の國防を建設することは長城よりも更に堅固に、自治の國脈を開拓することは運河よりも更に長く遠大でなければならない」と象徴的に言及されている。⁽⁹⁷⁾

まず「防共」についてである。「防共」は「共產黨を防ぐ」あるいは「共產インターナショナルから防衛する」といった意味で、中國では一九二〇年代初頭から「防共產黨」の表現が確認でき、その後この省略形である「防共」も使われるようになった。⁽⁹⁸⁾

一方、日本語での「防共」の初例は、管見の限りで冀東政府成立直前の一九三五年一〇月の陝西の共產軍の動靜を伝える文脈においてである。⁽¹⁰⁰⁾その後冀東政府成立に至る華北自治政權樹立の報道が伝えられる中「防共」は急増した。⁽¹⁰¹⁾日本における「防共」は、まさに冀東政府の動靜を含めた華北の事情が伝えられる中で社會に浸透していったのである。

ただ皮肉なことに冀東政府は熱心に「防共」政策に取り組んだわけではない。象徴的なのは、殷汝耕自身が冀東政府成立直後の一九三五年一月二六日、「共產の危機は、目下最大とは思われない」と發言している點である。⁽¹⁰²⁾政府の名稱に「防共」を冠している以上、冀東政府が「防共」に全く觸れないわけにはいかなかったと考えられるが、實際に冀東政府が「防共」に關しておこなったのは教科書の編纂やパンフレット作製に限られ、池宗墨も具體的に踏み込んだ議論を展開していない。これには華北自治運動を推進する際に、思想的な目標も必要であるとして、「防共」が土肥原賢二・佐々木到一・板垣征四郎ら日本軍人によって後から付け加えられたスローガンだったことも關係しよう。⁽¹⁰³⁾

むしろ西安事件勃發とその後の國共兩黨の融和については、無視できなかったと思われ、例えば一九三七年四月の「冀東政府の防共使命」で殷汝耕は、共產黨擡頭の危機を語っている。ただそこで防共對策として掲げられたものも、一・全

國に鞏固な防共政權を建てる、二、民本政策の確立、三、世界の反共國家との聯合（歐洲ではドイツ、東洋では日本）、といったことに過ぎず、具體的な政策が練られることはなかったのである。¹⁰⁶

次に「聯省自治」についてである。これも冀東政府の宣言ではしばしば言及されたが、冀東地區は河北省の一部に過ぎなかったこともあり、「聯省」實現への具體的な施策は確認できない。ただ「自治」については、冀東地區内の道路の整備修築、治水築港事業、税目の整理、冀東大學設立構想も含めた教育制度改革が推進された。冀東政府施政一周年の成果を誇る文獻の内容も「民政・保安・財政・建設・教育・實業」で項目が立てられている。このように冀東政府の施策の重點は地區内の振興にあり、決して「防共」や「外交」でなかった。冀東政府は名實ともに「自治」をそれなりに推進したと言える。¹⁰⁷

以上をもつて、「防共」は中國共產黨との、「自治」は中國國民黨との違いを示す言葉で、兩者を體現した「冀東政府こそ中華民國の正統を繼承する機關」と纏められるかもしれない。ただこれは結果論であり、殷汝耕や池宗墨が、「防共」は共產黨との、「自治」は國民黨との違いを示す言葉であると意識して議論を組み立てていた譯ではない。

七 殷汝耕・池宗墨に對する議論

（一）中國での議論

殷汝耕が冀東政府の成立宣言を發して間もない一九三五年一月二六日、國民政府は殷を免職するとともに、逮捕令を出し、¹⁰⁸華北分離に反對する學生運動も起きた（一二・九運動）。こうした状況下、中國での論調は冀東政府に否定的なものが基調をなし、殷汝耕・池宗墨の議論が肯定的な立場から解説されることもほとんど無かった。

ただ中國でしばしば伝えられた冀東政府内部の派閥争いに關する報道は、冀東政府の性格を考える上での材料を提供し

てくれる。それによると冀東政府の中には、池宗墨派・殷體新派・王廈材派・張仁蠡派の四つに加え、殷汝耕の妻民恵の弟である井上喬之と、民恵の妹の夫服部の派閥があった。このうち優勢だったのは池宗墨派だったが、残りが結託して池に對抗したため、殷の池に對する信用は徐々に搖らいだという。⁽¹¹⁷⁾

また別の報道は、自らの地位に不安を感じた殷汝耕が、銀行に現金を預け日本側から隠そうとしたところ、池宗墨は、殷の行爲は、「偽財政」(冀東政府の財政)を破壊し、民衆を恐慌に陥れると批判し、この事情を日本軍の田代(皖一郎)中將に告げ、その結果殷と池が衝突した、と傳えている。⁽¹¹⁸⁾ 殷については、北京の邸宅に妾を七人抱え、馴染みのダンサーが殷の暗殺を試みるなど、女性に纏わる噂もつきまとった。⁽¹¹⁹⁾ これに對し池にはそうした類の話は皆無である。むしろ池の「僧家の清規を守るが如くすべき」といった發言や周圍の評價からは、「孔孟學徒」や實直な理想主義者の姿が浮かぶ。

井上喬之の戦後の回想によれば、殷汝耕と懇意にしていた田中隆吉(中佐・關東軍參謀)に對抗するために、陸軍の專田盛壽は池宗墨に接近し、池も殷に取って代わる野心を起したという。⁽¹²⁰⁾ 先述したように、長官就任後の池が閹閥打破を標榜したことを考えれば、冀東政府内に閹閥の問題も絡んで、何等かの路線對立があったと考えられる。

(二) 日本での議論

冀東政府や殷汝耕については、外務省關係者を中心に否定的に見るものが多かった。上海總領事の石射猪太郎は、冀東政府から招かれていると就職相談に訪れた東亞同文書院生(石射にとっては後輩に當る)に對し、「デスカレデして置く[思いとどまらせた]」と日記に記している他、モンゴルで高度自治を要求していたデムチュクドンロブ(德王)の動靜にも、「殷汝耕や德王などと云ふ手合は東洋平和の敵なのだ」と、手厳しい。⁽¹²¹⁾

郭松齡事件の際に半年間にわたって殷汝耕を匿った經驗を持つ外交官中田豐千代も戦後の回想ながら、殷は「環境の變化に動搖を隠せない小人物」であったと回想し、當時奉天總領事だった吉田茂もまた同様の評價だったとする。⁽¹²²⁾

ただ辛口の評價の一方、冀東政府の方針を高く評價する人もいた。京都帝國大學教授の矢野仁一もその一人である。矢野は「殷君の理想の高遠なること、決心の鞏固なること、其の人民と疾苦を共にする考へで、生活振りの極めて質素儉約なることを聞いて、私は滿洲國において實現の出来なかつた私の王道政治の理想が、殷君に依り冀東地方の小天地において實現が出来さうに考へ、非常に面白いと思つた」と冀東政府の將來に期待した⁽¹⁵⁾。

ジャーナリストの川崎紫山は池宗墨について、「其の講演は一として君の理想とする王道精神の發露にあらざる〔は〕なく、其の一章と雖も、一句と雖も、經國濟民の教訓と爲らざるものは無い⁽¹⁷⁾」と高く評價し、その議論を集めて『王道經綸論集』と題して上梓した。

『夕刊帝國新聞』を刊行していた渡邊剛も冀東政府を支援した一人である。渡邊剛は「北支に曉鐘を撞く殷汝耕と冀東自治——我が大陸政策の方向」(夕刊帝國新聞社、一九三五年)、『我が大陸政策と武士道の拋棄か!?——孤立無援の冀東防共自治政府を斷じて見殺しにするな! 北支特殊地域の本義を確認せよ』(夕刊帝國新聞社、一九三七年)といった一聯の冊子で、冀東政府擁護の論陣を張った。渡邊は東亞人文研究所なる名義でも活動し、冀東政府に關する新聞記事を集成した『冀東』(一九三七年)も出版した。東亞人文研究所と聞くと何やら權威ある機關のようだが、住所は夕刊帝國新聞社と同じで、どこまで實態があつたのかは怪しい。當時話題になつていた冀東解消論への反論を、「研究所」を冠することで權威づけようとしたのであろう。實際、冀東政府は總合雜誌『創造』に資金を提供しており、おそらく渡邊の活動にも冀東政府から何らかの資金援助があつたと考えられる。

八 小結

以上、本稿では殷汝耕・池宗墨の経歴とその議論を通して、冀東政府について考察した。以下、明らかになった點を整理しておく。

一點目は、冀東政府長官の殷汝耕は、日本社會との關係を資本に中國政界進出を圖つたものの、結局その活動が日本との關係に終始した中國人政治家であつた點である。殷は日本に留學して日本人を妻に迎え、日本社會との接點も多く、近親者からも「精神的にもその他あらゆる意味で、日本的」と見られていた。⁽¹⁹⁾しかし殷は單純に「親日」で括られる人間ではない。一九一〇年代から二〇年代にかけての殷は、日中提携を唱えながらも、一方では日本政府の問題點や日本人の缺點を忌憚なく指摘し、中國の民意の趨向を掴むべきと訴えていた。より正確には「知日派」の中國人と言うべきだろう。ただ中國語での政論は確認できず、中國で發表された文章は日本の紹介か形式的な報告に限られた。中國國內での殷は「日本通」の枠を超える存在ではなく、政治的基盤も不安定であつた。

そうした殷汝耕が政治の世界に残ろうとすれば、頼れる政治資本は日本との關係しかなかった。これは殷が冀東政府樹立に至つた一つの原因と考えられる。ただ冀東政府は從來の殷の主張や行動とは矛盾する側面も持つていた。冀東政府の重要な宣言の起草を池宗墨に委ねた背景には、こうした殷の迷いが見え隠れする。

二點目は、冀東政府の構想には、實際には池宗墨の思想が色濃く反映されていた點である。そこには、「孔孟學徒」に象徴される、知識人としての理想や通成紡織での実績があつた。一方、政治の世界での池はいわば素人であつた。その點で池は一貫した思いを政治に表現することに躊躇がなかったとも言える。殷汝耕の失脚後、冀東政府を率いた池は、政府の機構改革や管内の視察を積極的に進めたが、まさに冀東政府は、池にとってその思想や活動を發展させ、實現する舞臺だったのである。

冀東政府解消後の池宗墨の行動にも、その志向の一端が窺える。池は中華民國臨時政府の議政委員に就任したものの、今後は「野に在つて、社會事業に従事し、父老兄弟と、共に農業を語る」と述べた。⁽²⁰⁾また臨時政府からのその功績に報いるために贈られた報獎金五〇萬元に對しても、池はそれを冀東建設に當てて欲しいと分配を要請した。⁽²¹⁾

もちろん、こうした事情をもつて池宗墨を清廉ないしは政治から距離をとつた人物と決めつけることはできない。實際

にはその後も池は、王道政治の實現を理想とする「聯邦政府」の樹立を唱え、日本國內に向けても運動をしていたからである。⁽¹²⁾ただそうした水面下の政治活動も王道政治の實現を目指すものであったし、その體現者として自身の姿勢を積極的
に示そうとした點は池の特徴だった。冀東政府における殷汝耕と池宗墨の對立には、こうした兩者の氣質や志向の違いも影響したと考えられる。

三點目は、冀東政府での議論が、圖らずもその後日中戦争の過程で日本占領地に樹立された政權の先驅けとなった點である。反國民黨・反國民政府を掲げたことはもちろん、五色旗を掲げることで國民政府との絶縁を示し、一方で中華民國の正統性を唱えるやり方は、その後の臨時政府・維新政府でも採用された。

ただ冀東政府は日本軍部の強い影響下に成立したものの、日本の意向を無限定に受け入れたわけではない。これは冀東政府の五色旗採用の事情にも表れている。冀東政府は、政府成立一周年を期して五色旗を掲げたが、その際滿洲國國旗を採用する案も存在していた。⁽¹³⁾結局滿洲國國旗が採用されることはなかったものの、これは冀東政府の選擇肢として滿洲國との合流、すなわち中華民國からの離脱があつたことも傳えている。

一九三六年に華北から日本に戻つたある日本人は「往時を追慕する帝政の還元の熱が、一時に擡頭して異常なる力を以て北支を風靡しつゝある」と、華北に帝政を目指す動きがあることに觸れ、「願くば滿洲帝國との併合を望む」と語つて⁽¹⁴⁾いる。冀東政府は地理的に滿洲國に隣接していたが、殷汝耕の姉が滿洲國國務總理の鄭孝胥の息子に嫁いでいるなど、人的關係でも滿洲國に近かつたのである。

しかし、結局選ばれたのは中華民國という枠組みであつた。殷汝耕も冀東政府は臺灣や滿洲國とは異なることを明言し、また日本政府の冀東問題への介入に警戒感を示したことは先述した。冀東政府は廣く日本の傀儡と理解されている。しかし、それは決して無制限の「親日」や「日本追従」ではなかつた。冀東政權解消の後、日本人に對して「どうも日本の方と御交際をすると云ふことはどう信用して宜いか分らない。誠に危いと云ふ感じがする」⁽¹⁵⁾と語る殷汝耕の眼差しは冷めて

いる。そして日本の影響下に成立したものの、日本からは獨立した存在た然とした冀東政府の抱えたジレンマは、形を變えながらその後の占領地政權でも課題であり続けることになる。

註

- (1) 村田孜郎「冀東政權と殷汝耕」『北支の解剖』六人社、一九三七年、四一頁。
- (2) 秦郁彦『日中戦争史』（増補版）、一九七二年（初版は一九六一年）、五八一六八頁、日本國際政治學會太平洋戰爭原因研究部編『太平洋戦争への道』第三卷、朝日新聞社、一九六二年、一三七―一八七頁（當該部分は島田俊彦執筆）。
- (3) 安井三吉『盧溝橋事件』研文出版、一九九三年、五七頁。
- (4) 内田尚孝『華北事變の研究——塘沽停戰協定と華北危機下の日中關係一九三二―一九三五年』汲古書院、二〇〇六年・光田剛『中國國民政府期の華北政治——一九二八―一三七年』御茶の水書房、二〇〇七年。
- (5) 廣中一成『冀東政權と日中關係』（汲古書院、二〇一七年）は、第二章「殷汝耕と日本」で殷の經歷を扱うが、その思想・人物像や、冀東政府樹立に至る葛藤等については明快な説明がない。また池宗墨の役割については言及がない。
- (6) 藤枝賢治「冀東政府の對冀察合流をめぐる陸軍の動向」『日本歴史』第七〇九號、二〇〇七年六月、同「冀東貿易をめぐる政策と對中國關稅引下げ要求」『軍事史學』第四卷第三・四號合併號（日中戦争再論）、二〇〇八年三月。
- (7) 吉井文美「日本の華北支配と開瀾炭礦」久保亨・波多野澄雄・西村成雄編『戦時期中國の經濟發展と社會變容 日中戦争の國際共同研究五』慶應義塾大學出版會、二〇一四年。
- (8) 關智英「上海市大道政府と西村展藏」『近きに在りて』第五二號、二〇〇七年十一月。
- (9) 古屋哲夫「アジア主義とその周邊」同編『近代日本のアジア認識』京都大學人文科學研究所、一九九四年。古屋は日本の「大亞細亞主義者」は中國以外には提携の手掛かりを持っていないにも拘わらず、その唯一の提携相手である中國に對しても「驕慢度し難き態度」であるため、「到底（アジア）聯盟は出来る見込はない」という殷汝耕の立場を紹介する（同書九四―九五頁）。ただ殷汝耕のアジア主義に關する議論はこれに止まらない。
- (10) 劉岳兵「學術・思想史の視點より見た近代中日關係史における幾つかの問題點」『人文科學』第一三號、二〇〇八年三月。劉は池宗墨を思想的漢奸とし、「王道」を偽善化

したとする。ただ「王道」を「善・偽善」で分析するには無理がある。

- (11) 邵雲瑞・李文榮「偽『冀東防共自治政府』成立經過」中國人民政治協商會議河北省委員會文史資料研究委員會編『河北文史資料選輯』第九輯、河北人民出版社、一九八三年・王士立・鍾群莊・趙競存・李宗國編『二十世紀三十年代的冀東陰雲——偽『冀東防共自治政府』史略』（唐山文史資料第二一輯）河北省唐山市政協文史資料委員會、一九九九年・陳曉清「殷汝耕」熊尙厚・嚴如平主編『民國人物傳』（第一一卷）中華書局、二〇〇二年。
- (12) 南開大學歷史系・唐山市檔案館合編『冀東日偽政權』檔案出版社、一九九二年。
- (13) 李秉奎・付春端「偽冀東防共自治政府警團武裝述評」『唐山學院學報』第一六卷第一期、二〇〇三年。
- (14) 劉君實「冀東偽組織的暴露」『建言月刊』第一卷第三期、一九三七年七月。
- (15) 殷汝耕の冀東政府成立宣言發表を十一月二五日とするものもあるが、正確には十一月二四日夜半であった（龔維航「殷汝耕訪問記」『大上海人』第五／六期、一九三六年一月五日）。二四日に宣言が發表され、翌二五日に政府が成立したと考えられる。
- (16) 高木翔之助「冀東政權の正體」北支那社、一九三七年、二五頁。
- (17) 「冀東二十二縣人口統計表」『冀東防共自治政府成立週年紀念專刊』上卷、冀東防共自治政府、一九三六年。
- (18) 「北支自治運動」「北支那」臨時增刊冀東一周年紀念號、一九三六年十一月、四一—五頁。
- (19) 宮田天堂「冀東政權大祕録——通州事件一週年を迎へて」同人、一九三八年、四頁。
- (20) 關智英前掲「上海市大道政府と西村展藏」。
- (21) 陸軍省軍務課「殷汝耕の放送に關する件」（一九三七年四月二三日）、陸軍省、陸滿密大日記 S12.10.57、防衛省防衛研究所。
- (22) 「冀東防共自治政府の代表として」及び「冀東防共自治政府成立の經緯」東亞人文研究所編『冀東』同所一九三七年、一一二、二一六—二一八頁。
- (23) 王慶材「中國政治敗壞の原因」『北支那』第四卷二月號、一九三七年。
- (24) 服部^{マツロウ}ゆり子「我が姉「殷汝耕夫人」を語る——北支自治の盟主殷汝耕のよき内助者としての姉民慧」『話』第四卷第二號、一九三六年二月。
- (52) 小林橘川「隨筆支那」教育思潮研究會、一九四三年、二五一頁。
- (26) 殷汝耕「日支親善に就て日本の朝野に訴ふ」『東京朝日新聞』一九一七年六月二六日四面。
- (27) 石塚英藏「江蘇省棉花栽培事業ノ件」（一九二一年九月二六日）、支那ニ於ケル綿業關係雜件三、江蘇省棉花栽培事業ニ關スル件（東洋拓殖株式會社殷汝耕間）、支那ニ於ケル綿業關係雜件、177-16、外務省外交史料館。
- (28) 殷汝耕「半載回顧錄 重圍を逃れて五」『大阪毎日新聞』

- 一九二六年七月二六日一面。
- (29) 龔維航前掲「殷汝耕訪問記」。
- (30) 「殷汝耕回國 謂濟案不難解決」『京報』一九二八年六月二〇日三版。
- (31) 齊世英講「齊世英先生訪問紀錄」中央研究院近代史研究所、一九九〇年、一一四—一八頁。
- (32) 南京市檔案館編「審訊汪偽漢奸筆錄」下、鳳凰出版社、二〇〇四年、一一六三頁。
- (33) 村瀬信一「首相になれなかった男たち——井上馨・床次竹二郎・河野一郎」吉川弘文館、二〇一四年、一九九—二〇〇頁。
- (34) 「中日結婚之東訊」『益世報』一九一七年九月一三日三版。民恵を民慧とする表記もあるが、同一文章中で殷民慧と井上民恵を區別する用例があるので、民慧は中國名であつたと考えられる（服部百合子「殷汝耕氏の妻としての姉」『婦人公論』一九三六年二月號）。
- (35) 汝氓「日本通殷汝耕」『微言』第一卷第五期、一九三三年六月・海天「由殷汝耕叛國說到中國教育」『國光雜誌』第一期、一九三五年二月。
- (36) 尾崎秀實「殷汝耕氏と會見の記」朝日新聞社編『現地に支那を視る——最近支那時局の再檢討』朝日新聞社、一九三六年、九〇頁。
- (37) 池宗墨「利民通成紡織公司短纖維工業經營之經過與吾輩今後之覺悟」『染織紡週刊』第一卷第三、第九、第一〇期、一九三五年八月・一〇月。
- (38) 「殷汝耕氏の意見に就て（日支兩國國民性）」『讀賣新聞』一九二一年九月五日三面。
- (39) 殷汝耕「偽らざる對日感情の告白（五）」『讀賣新聞』一九二一年一月六日二面。
- (40) 殷汝耕「目覺めたる支那より（一二）」『讀賣新聞』一九二一年九月四日二面。
- (41) 殷汝耕「目覺めたる支那より（一）」『讀賣新聞』一九二一年八月三日二面。
- (42) 殷汝耕「目覺めたる支那より（五）」『讀賣新聞』一九二一年八月二七日二面。
- (43) 殷汝耕「目覺めたる支那より（七）」『讀賣新聞』一九二一年八月二九日二面。
- (44) 「長官肖像 附略傳」前掲『冀東防共自治政府成立週年紀念專刊』上卷。
- (45) 殷汝耕「華盛頓會議と日支今後の關係——解決の方法がある（上）」『讀賣新聞』一九二二年二月二日三面。
- (46) 殷汝耕「米國排日の對策——日支兩國の共存共榮」『讀賣新聞』一九二四年六月三〇日四面。
- (47) 陳德仁・安井三吉編「孫文・講演「大アジア主義」資料集——一九二四年二月日本と中國の岐路」（孫中山記念會研究叢書二）法律文化社、一九八九年、七六頁。
- (48) 關智英「東洋Ⅱ王道」「西洋Ⅱ霸道」の起源——王正廷・殷汝耕・孫中山」『孫文研究』第五九號、二〇一六年二月。
- (49) 出淵（勝次）亞細亞局長口述「孫逸仙來邦二關スル件」

(一九二四年一月二八日)、江浙竝奉直紛擾關係／本邦ニ於ケル孫文及盧永祥等ノ行動 B.1.6.1.854 外務省外交史料館。

(50) 殷汝耕「余が蹶起の理由」廣島高等師範學校地歴學會編『北支と滿洲國』朝日書房、一九三六年、九一―三頁。

(51) 北平加藤書記官↓有田外務大臣(一九三七年一月一八日發)、帝國ノ對支外交政策關係一件第七卷 A.1.1.0.10.007 外務省外交史料館(原文カタカナ)。

(52) 專田盛壽「親日華北政權樹立の夢崩る」土肥原賢二刊行會編『日中友好の捨石 土肥原賢二』芙蓉書房、一九七二年、二八六―二八七・二九一―二九三頁。

(53) 池宗墨『王道經綸論集』大東亞協會、一九四一年、一四一―一五頁。

(54) 「宋氏とは合流せず 自治完成に邁進 國內から賛成激勵 殷汝耕氏會見記」『東京朝日新聞』一九三五年一月二二日二面。

(55) 殷汝耕撰『冀東防共自治政府第一週年紀念詞』一九三六年、七―九頁。この文章は池宗墨の文集に掲載されていないことや、冀東政府一周年に際して池宗墨は別に文章を發表していることを考えると、殷汝耕自身の文章である蓋然性が高い。

(56) 殷汝耕「冀東政府成立の意義を語る」冀東防共自治政府『冀東政府は語る』同政府、一九三七年、二一九、一二一―一五頁。

(57) 殷汝耕「冀東問題に對する吾等の信念」前掲『冀東政府

は語る』三五頁。

(58) 宮田天堂前掲『冀東政權大祕録』三五頁。

(59) 池宗墨「中國の復興と冀東政府」『北支那』第三卷九月號、一九三六年。

(60) 深田流川「池宗墨祕書長の印象」『北支那』第三卷七月號、一九三六年。

(61) 池宗墨前掲「中國の復興と冀東政府」。

(62) 池宗墨「孔子論」新東洋社・東洋事情研究會、一九三六年、序文及び八頁。

(63) 井上哲次郎『哲學と宗教』弘道館、一九一五年、三三六頁。

(64) 池宗墨前掲『染織紡週刊』第一卷第三、第九、第一〇期。『通成紡織公司』『商業月報』第九卷第八期、上海市商會、一九二九年九月三〇日。

(65) 池宗墨前掲『染織紡週刊』第一卷第九期。

(66) 池宗墨前掲『染織紡週刊』第一卷第一〇期。

(67) 池宗墨「中國近代之危機與吾輩青年之責任」『染織紡週刊』第一卷第一三期、一九三五年一〇月。

(68) 池宗墨「辦國貨事業者應具之精神」『申報』一九三三年二月九日一八版。

(69) 池宗墨「上海職業指導所で講演をした記事がある」『職指所舉行服務演講』『申報』一九三三年二月二日一三版。

(70) 天然「介紹幾個有心人」『申報』一九三三年一月二三日一四版。

(71) 蔣維喬「參觀通成紡織廠記」『申報』一九三三年九月一

- 四日一三版。
- (73) 常州市地方志編纂委員會編『常州市志』三、中國社會科學出版社、一九九五年、九九九頁。
- (74) 「因是齋日記」一九三三年六月二十九日の條。蔣維喬『蔣維喬日記』第一六冊、中華書局、二〇一四年、三三一—三三二頁。
- (75) 蔣維喬前掲『蔣維喬日記』、三二七—贊六六頁。
- (76) 川崎紫山「王道經綸論集に題す」池宗墨前掲『王道經綸論集』二五頁。
- (77) 池宗墨『池長官文存』冀東防共自治政府祕書室、一九三八年、一頁。
- (78) 岡部巖夫「殷汝耕と語る」『思想國防』第二卷第一號、一九三六年一月。
- (79) 武田南陽「回首茫茫夢一場」『五十人の新聞人』電通、一九五五年、二九八頁。
- (80) 池宗墨「學生時代は一朵の鮮花の如し」前掲『王道經綸論集』五三頁。
- (81) 池宗墨「自ら多福を求む」前掲『王道經綸論集』七四頁。
- (82) 池宗墨「服從」前掲『王道經綸論集』五五頁。
- (83) 池宗墨「師範生は未來國民の母たり」前掲『王道經綸論集』六六頁。
- (84) 池宗墨「我を撫すれば則ち后」前掲『王道經綸論集』九一頁。
- (85) 「はしがき」高木翔之介編述『改組した冀東政權と新長官池宗墨の思想』北支那社、一九三七年。
- (86) 池宗墨「今日の世界は白人の天下乎。抑々黃人の天下乎」前掲『王道經綸論集』一三〇—一三二頁。
- (87) 池宗墨「師範生は未來國民の母たり」前掲『王道經綸論集』六四頁。
- (88) 池宗墨「仁義の邦 仁義の人」前掲『王道經綸論集』六八頁。
- (89) 池宗墨「國家の敗るゝは官邪に由る」前掲『王道經綸論集』六三頁。
- (90) 池宗墨「池長官第一二次出巡各縣講演錄——附通電演詞」冀東防共自治政府祕書室、一九三八年。
- (91) 池宗墨「各處の廳長暨祕書課長に對する訓話」前掲『王道經綸論集』一四六—一四七頁。
- (92) 高木翔之介前掲『改組した冀東政權と新長官池宗墨の思想』五一—六頁。
- (93) 山本實彦『支那事變——北支の卷』改造社、一九三七年、四〇頁。
- (94) 池宗墨「大小精粗」前掲『王道經綸論集』一一五—一一七頁。
- (95) 小林知治「新支那の中心人物は誰々か」今日の問題社、一九三八年、一九頁。
- (96) 「平津漢奸第一審 由冀高法院辦理」『申報』一九四五年二月一〇日一版。
- (97) 東亞文化協會前掲『排日教科書改訂事業』二二頁。
- (98) 「政府防共產黨」『益世報』一九二二年三月一日五版。
- (99) 「杭市總工會通令防共」『申報』一九二七年八月二十四日九

版。

- (100) 『陝西共產軍の現勢』『滿洲日日新聞』一九三五年一〇月一四日二面。
- (101) 全體の傾向を掴むために神戸大學附屬圖書館新聞記事文庫で「防共」を検索したところ、一九三五年九月まで共產黨を防ぐという意味での「防共」は確認できないが、同年一〇月に入ると、一四日に一件、二〇日に一件、二四日に一件確認され、さらに十一月には、冀東政府前日までで四件、冀東政府成立後の十一月三〇日までで一〇件、十二月に一三件、一九三六年一月は六件、と「防共」が華北自治の報道と共に使われたことがわかる。
- (102) 龔維航前掲「殷汝耕訪問記」。
- (103) 廣中一成前掲書二七頁・『極東國際軍事裁判速記録』第二八號（一九四六年七月九日）新田滿夫編『極東國際軍事裁判速記録』第一卷、雄松堂書店、一九六八年、三一頁。
- (104) 殷汝耕「冀東政府之防共使命」『太平洋月刊』第四卷第四期、一九三七年四月一五日。
- (105) 前掲『冀東防共自治政府成立週年紀念專刊』。
- (106) 「訓令直轄各機關 奉令飭拏殷汝耕并撤銷灤榆密兩區行政督察專員轉行知照一案令仰知照」『內政部公報』第八卷第二二期、一九三五年二月。
- (107) 大柴「冀東一角的形形色色」『申報週刊』第一卷第三七期、一九三六年九月。
- (108) 「兩漢奸衝突 殷汝耕池宗墨」『瓊崖民國日報』一九三七年五月三二日二版。
- (109) 國松文雄『わが滿支廿五年の回顧』新紀元社、一九六一年、二七六頁。
- (110) 張樂平「漫畫報告 俠女謀刺殷逆記實」『中國漫畫』第二期、一九三七年一月。
- (111) 「殷汝耕懼內醜史」『玲瓏婦女圖書雜誌』第五卷第四八期、一九三五年二月。
- (112) 崑山清行「悲運の人殷汝耕」『東京兵團』（一胎動篇）光風社、一九六三年、九〇頁。
- (113) 石射猪太郎著、伊藤隆・劉傑編『石射猪太郎日記』中央公論社、三七頁（一九三六年三月一三日の條）。
- (114) 石射猪太郎前掲『石射猪太郎日記』一五一頁（一九三七年三月一七日の條）。
- (115) 中田豐千代『ある外交官の手記——中國との友情』私家版、二〇〇八年、五三頁。
- (116) 矢野仁一『現代支那概論——動かざる支那』目黒書店、一九三六年、二三六頁。
- (117) 池宗墨前掲『王道經綸論集』例言二頁。
- (118) 北京軍特務部長↓陸軍次官（一九三八年十一月二二日發）陸軍省陸滿普大日記 53250、防衛省防衛研究所。
- (119) 服部ゆり子前掲「我が姉「殷汝耕夫人」を語る」。
- (120) 「池宗墨通電述懷 冀東實行合流從此得卸仔肩 當以在野之身從事社會事業」『晨報』一九三八年二月四日四版。
- (121) 「廉潔可風 池宗墨氏 捐助酬金建設冀東 分配辦法現已決定」『晨報』一九三八年六月一六日三版。
- (122) 北京坂西公館中田通譯官「北支ニ於ケル新中央政權樹立

運動」(一九三八年一月五日)、支那事變ニ際シ支那新政府樹立關係一件／支那中央政權樹立問題(臨時維新政府合流問題連合委員會關係、吳佩孚運動及反共、反蔣救國民衆運動)第一卷(A.6.1.1.8.3.001)、外務省外交史料館。

(123) 冀東政府解消後、池宗墨は吳佩孚擁立工作に關わつていた。「擁吳運動之過去與現在」(内容から一九三九年一月以降と考えられる)・池宗墨『時局ニ關スル意見書』(一九三八年九月一日)、眞崎甚三郎關係文書、國立國會圖書館憲政資料室。

(124) 小方「冀東視察記」『申報週刊』第一卷第四九期、一九三六年十二月一三日。

(125) 北原太郎『冀東政權を顧みて——會田勉先生講演筆記』日華協會出版部、一九三六年、九頁。

(126) 前掲「殷汝耕夫人と語る 夫君を扶けて 毅然たるその態度」北支民衆の爲に」。

(127) 湯澤三千男述『北支建設情勢其他に就て——要旨』日本外交協會、一九三九年四月、三九頁。

In order to achieve the objectives mentioned above, this paper makes use of American, Chinese and Japanese diplomatic documents, American Methodist Mission papers, regional literature, and data collected through oral history methods by this author in Fujian province.

THE JIDONG GOVERNMENT AND ITS IDEOLOGY : A CASE STUDY ON YIN RUGENG AND CHI ZONGMO

SEKI Tomohide

The East Hebei Autonomous Government (or Jidong government) is generally known for being a Japanese puppet regime that was active before the outbreak of the Second Sino-Japanese War. This paper will reconsider the position of the Jidong government within modern Chinese history by focusing on the discourse of Yin Rugeng 殷汝耕 (its chairman) and Chi Zongmo 池宗墨 (its secretary). Particular attention will be paid to the following three points.

The first point is that Yin Rugeng symbolized a type of Chinese person who was active in promoting interactions between China and Japan from the 1910s to the 1940s. From the 1910s, Yin engaged in negotiating with Japan and consistently called for a partnership between the two nations. In Japan, Yin was regarded as a famous Chinese activist, but in China, he was seen to be nothing more than a mere “Japan Hand.” For Yin, the outbreak of conflict between Japan and China meant losing a platform for himself.

The second point is that Chi Zongmo's perspective strongly affected Jidong government policy. In this regard, his political ideals often drew upon Confucian values and his experience working as a manager for the Tongcheng Spinning & Weaving Company. After Yin Rugeng's fall from grace, Chi Zongmo proceeded aggressively with governmental reform and visited many prefectures in the Jidong area. This demonstrates how for Chi Zongmo, the Jidong government functioned as an experimental platform upon which he could develop his ideas and activities.

The third point is that the policy practiced by the Jidong government set a number of precedents for other Chinese puppet governments who operated out of occupied areas during the Second Sino-Japanese War. For example, some Chinese puppet governments made anti-Kuomintang/anti-Nationalist claims and engaged in the practice of flying a five-colored flag to demonstrate their disassociation with the Nationalist government and to distance themselves from the Republic of China's

orthodoxy. However, the Jidong government was not receptive to all Japanese demands. Yin Rugeng often declared that the Jidong government was different from Taiwan or Manchukuo and was wary of intervention by the Japanese government in its own problems.

The biggest dilemma for the Jidong government was that although it was established under Japanese influence, it nevertheless wanted to be independent of Japan. This continued to be a challenge for subsequent Chinese puppet governments as well.